

◆飛鳥寺の調査—1996-1・3次、第84次

1 西門地区の調査 (1996-1次)

はじめに

本調査は、飛鳥寺西門跡に隣接する奈良県有地を公園整備するのに先だって行った。調査地は、飛鳥大仏を安置する安居院本堂(中金堂跡)の西約80m、「入鹿の首塚」と俗称される五輪塔の東側、西門跡推定地の一部とその外の一郭である。調査面積は262㎡。

1956・57年調査の結果、飛鳥寺は一塔三金堂の特異な伽藍配置が判明した(『飛鳥寺発掘調査報告』奈文研学報第5冊 1958年、以下『飛鳥寺報告』)。この時、寺域確認のために西門および南門とその南方の参道が調査され、それをもとに二町四方の寺域を復元した。

その後、1977年に大字飛鳥集落の北で北面大垣を確認(『藤原概報8』)、1982年にその東方で大垣東北隅と東面大垣を確認した(『藤原概報13』)。それによって、寺地は南北に長い台形で、南北293m、東西は北で215m、南で約260m、面積約70,000㎡と推定されるに至った。なお、寺域の南限は南門ではなく、それに接続する石敷参道の南端と考えている。ちなみに、『太子伝玉林抄』『太子伝古今目録抄』などによれば、飛鳥寺の四つの門には各々、東門に「飛鳥寺」、西門に「法興寺」、南門に「元興寺」、北門に「法満寺」の扁額が掲げられていたという。

1956年の調査によって、西門は礎石建ち八脚門と推定され、正面11.3m(高麗尺32尺)、奥行き5.3m(15尺)、推定基壇規模が正面13.8m、奥行き9.3mに復原された。正面の柱間は中央だけが4.2m(12尺)、両脇が3.5m(10尺)で、中央間が広い。梁間は2.6m(7.5尺)等間である。南門は正面8.8m・奥行き4.6mで、西門の方が大きい。

西門の外側の状況については、本調査区の南での調査(1984年度K地点調査区『藤原概報15』)と北での調査(1969年橿原考古学研究所飛鳥京跡第18次調査『飛鳥京跡二』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第40冊、奈文研

1989-2次調査『藤原概報20』)、および西での調査(1966年橿原飛鳥京跡第11次調査『飛鳥京跡二』)などによって、次のようなことがわかっている。

西門あるいは西面大垣から西約9mに幅1.2mの石組大溝SD6685があり、西約18mにも幅0.5mの石組小溝SD6684がある。大垣と石組大溝の間には石敷SX736・737や石列SX735がある。石組大溝の西に接して南北方向の掘立柱塀SA738があるが、これは大溝を作るときには撤去されていた。大垣の西約14mの地下には土管暗渠SX740が埋められていた。また、今調査区の西には、幅4.3mの玉石敷南北道路SH6682がある(図46)。

今回の調査は、これらの過去の調査成果に基づき、西門およびその外側の状況の把握を目的とした。

基本層序

盛土(20~40cm)、旧水田耕土(20cm)、床土(20~40cm)の下層に中世の遺物を含む灰黄色砂質土(10~15cm)があり、これを除去して遺構検出を行った。調査区東辺では、床土直下に古墳時代の包含層である暗褐色粘質土が現れ、この上面で遺構を検出した。石列SX735あたりから西には、7世紀後半の整地土層(褐色砂質土・褐色ガラス層)が残り、その上面で遺構検出を行った。その後、これを部分的にはずして下層遺構を調査した。

飛鳥時代の遺構

西門SB240 礎石立ちの八脚門。1956年の調査では、基壇の一部および、南北3列ある柱のうち棟通りと東側柱筋の合計7箇所て柱位置を確認した。そのうち東側柱筋の南端と南から2間目に礎石が残っていた。門の基壇東側には河原石で組んだ雨落溝(SD241)がある。SD241の西側石は基壇東側の化粧を兼ねる。基壇南辺は後世の破壊が著しく、基壇の南縁は確認できていない。

今回は、西側柱筋の柱位置2箇所を確認し、八脚門を確定した。礎石は残っていなかったが、門の北西隅とその南側で据付掘形を確認した。推定される柱の間隔は、



図39 石組小溝SD6684 (北から)



図40 石組大溝SD6685 (北から)

脇の間の柱間3.5mとして矛盾はない。北西隅の礎石掘形は、直径1.3m、検出面からの深さ15cmで、黄褐色山土が版築状に詰まる。基壇土および基壇化粧は全く残っていなかった。推定基壇西辺にある小穴列SX923とその西の小穴列SX925は、基壇東側縁石と雨落溝側石を門の中軸線で折り返した位置にあり、基壇縁石と雨落溝側石の抜取痕跡かも知れない。

基壇の西側および北側では、足場の柱穴列SS920・921を検出した。SS920は西側柱礎石位置から西約2.3mにあり、北1間が3.0m、南2間は2.1m等間となる。SS921は柱間2.1mの1間のみ。西門北妻柱筋から1.45mを隔てる。SS920の南端の柱穴とSS921東側の柱穴は、柱抜取穴に黄色の山土が充填され、掘形にも若干の山土が混じるが、SS920の北側3個の柱穴は掘形に山土が含まれず、抜取穴埋土は灰褐色砂質土で瓦片を含む。2時期の足場穴に区分できるのであろう。

石組大溝SD6685 調査区のほぼ中央にある石組溝。溝幅は約1.2m、深さ0.5m。側石の最も大きいものは幅70cm、長さ1mある。西門の正面でも溝幅や深さに違いはなく、橋のような施設もない。溝埋没後、西側に素掘溝SD739が掘られたため西側石のいくつかは倒れ、また、東側石のいくつかは抜き取られていた。溝底には拳大の河原石を敷くが、北の方では瓦が混じる部分があり、改修を受けている。掘形から瓦片と土器片（飛鳥Ⅱ～Ⅲ）が出土した。埋土からは、大量の瓦のほか、土器と若干の鉄器が出土した。溝の北部では東側から瓦を投棄した状況が残っていた。土器は7世紀代でおさまる。

今調査区南の1984年K調査区ではSD6685の下層に、後述するSA738と柱位置が一致する柱穴を検出した。これが、南北塀になる可能性を想定し、推定柱位置で底石を除去して調査したが柱穴はなかった。

石列SX735と石敷SX736・737 SD6685の東側石の東1

mには、石列SX735がある。今調査区では、石は1石を残してすべて抜取られていた。石列と石組大溝の間には石敷SX736があり、石列の東にも石敷SX737がある。ともに、部分的に残存していたにすぎない。SX736の南の方は後に、瓦敷に改修される。二つの石敷は、5cmほどの差で東側のSX737が高い。なお、北で行った1989年度の調査では、石列SX737のさらに東1mにも石列跡SX734を確認しているが、今回は検出しなかった。

石組小溝SD6684 調査区の西辺で確認した幅0.5m、深さ10cmほどの溝。西側に直径40～50cmの大きな石を、東側には直径20～30cmの小振りの石を並べる。北では底石が残っていた。調査区南辺から北約4.5mの位置には、この溝を横断するように東西に並ぶ石列SX946があり、その北は長さ約1mにわたって小石を積み上げている(SX947)。石列SX946の南に接する部分ではSD6684の西側石が2・3石分抜けているので、北へ向かう流水を西に向けるための施設と思われるが、その行方は調査できなかった。今調査区の西に接して、発掘調査が行われている（飛鳥京跡第11次調査）が、関連しそうな遺構は未確認。SD6684は掘形埋土に瓦や土器を含み、石組大溝SD6685に似る。2条の溝の間隔は心間距離で8.8mである。

SD6684の東西には、石敷SX937・948やバラス敷SX951がある。バラス敷SX951は土管暗渠SX740の掘形を完全に覆っていた。

南北塀SA738 石組大溝SD6685の西に接した位置にあり、素掘溝SD739の底で検出した。柱の間隔は2.6m前後。西門の正面でも柱間は変わらない。柱掘形は一辺1.2m前後、検出面からの深さ1m。掘形埋土に若干の瓦片が混じり、柱抜取穴には黄褐色山土が詰まる。SD6685より古い。調査区の南辺では、この掘立柱塀SA738の西約4mで柱穴SX935をみつけた。後述する土管暗渠SX740の掘形を掘り込む。柱抜取穴には若干の黄褐色山土が混じ

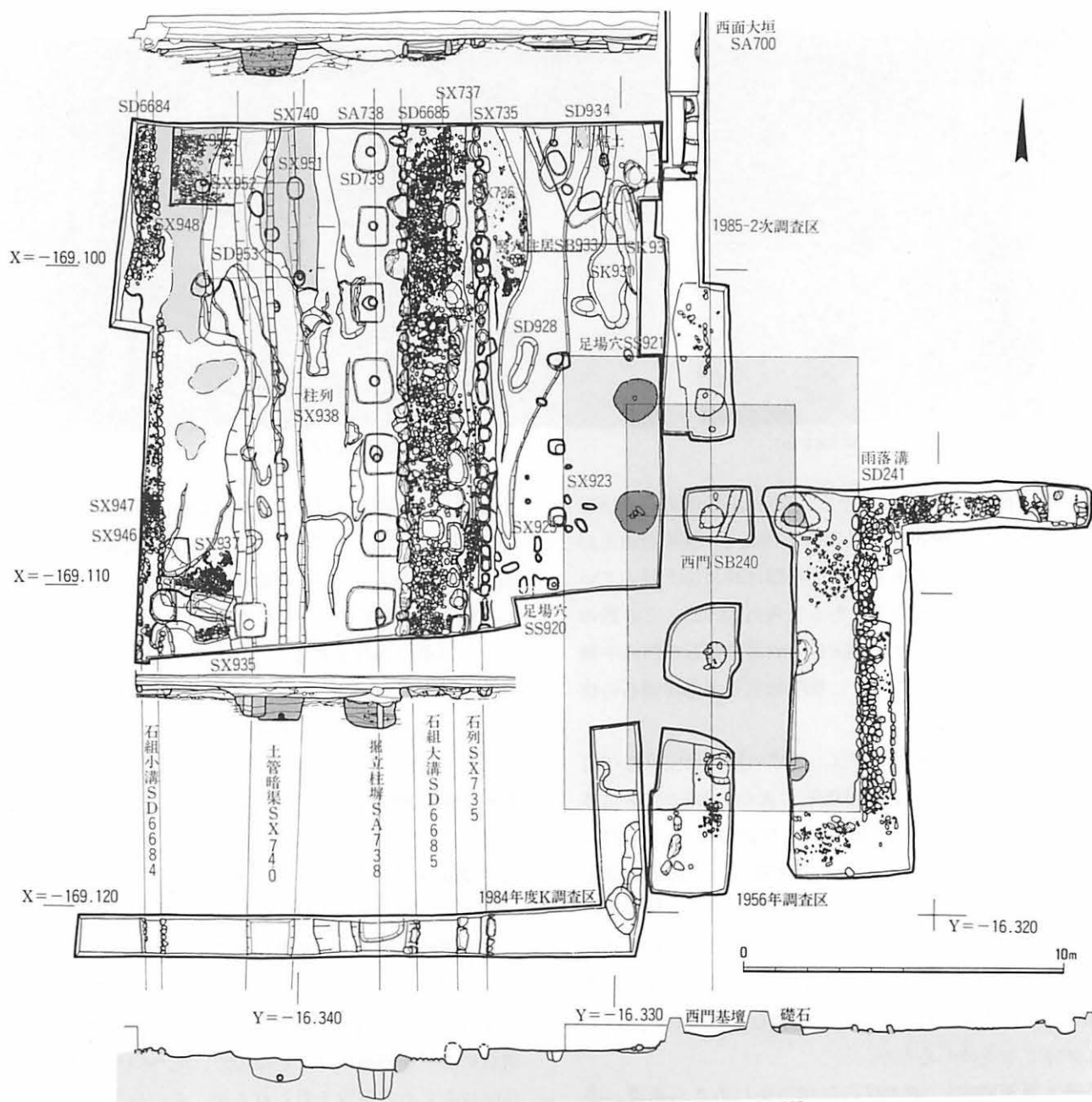


図41 飛鳥寺1996-1次調査遺構図・土層図 1:200



図42 土管



図43 土管暗渠SX740 (北から)

る。SX935の北と西には、関連する柱穴はない。

土管暗渠SX740 直径約20cm、筒部の長さ約40cmの瓦製土管をつないだ施設。今調査区南の1984年度調査区と北方の1989-3次調査区で掘形と北の1989-2次調査区では、土管本体を確認している。調査区内で土管41個を検出した。玉縁を北に向けて据えられ、調査区の北端は南端より5cm低い。土管の並びは直線ではなく、調査区内でごく緩いS字形を描く。

暗渠掘形は、幅1.5～1.8m、深さ1mの溝状。古墳時代の河川堆積土の上面に山土を置いた上に細かい瓦片で瓦敷SX955を作り、その上にさらに盛土整地した面から掘り込まれる。掘形は、土管設置後、黄褐色山土や礫を交えた土で版築状に埋め立ててある。埋土に、少量の瓦と土器を含む。

その他の遺構 SX952は、土管掘形と重複する4個の柱穴。南北2.9m、東西3.0mに4個が四角く並ぶ。柱掘形は土管掘形より新しく、石敷SX948より古い。

土管の直下では、柱間約2.6mの柱列SX938を検出した。柱穴の直径は30～40cmほど。柱抜取穴に黄色い山土が混じる。柱位置が南北塀SA738とはほぼ一致するので、これと一連の柱列とも考えられるが、両者の距離は3mあって足場穴としては遠すぎる。

斜行溝SD942は、柱穴SX935と重複する、南東―北西方向の素掘溝。埋土に山土と瓦片を含む。

奈良時代以降の遺構

素掘溝SD739 幅約3mの素掘溝。南北に走り、東岸は石組大溝SD6685の西側石を護岸とする。埋土下層は分厚い砂礫層。調査区北半部では最終的には西に蛇行する(SD953)。SD739・953からは大量の瓦のほか、11世紀までの土器が出土した。

SD6685の東方にも細い溝(SD928・934)がある。他に、土坑があり、SK930・931からは大量の瓦が出土した。

古墳時代の遺構

調査区東北隅では、飛鳥時代整地土層の下層で、方形の堅穴住居SB933を検出した。北辺と東辺は調査区外にあるが、一辺3m以上である。南辺に長径90cmの貯蔵穴があり、周辺から土師器高杯や甕・壺が出土した。また、床面の中央やや北寄りの床面が焼けていた。竈の痕跡であろう。時期は、出土土器から5世紀後半。同時期の遺構は、他に土管掘形断面で確認した河川跡がある。

表4 飛鳥寺1996-1次調査軒瓦等点数表

型 式	点数	型 式	点数
I a	12	角端点珠	1
I	35	IX	1
IIIa	4	XIV	26
IIIb	4	XVb	1
III	21	型式不明	5
IV	13	軒丸瓦計	171
V	16	川原寺763	1
IVヵV	8	軒平瓦計	1
VI	5	垂木先瓦 I	1
VII	2	垂木先瓦IV	4
VIII	4	型式不明	1
星組型式不明	13	垂木先瓦計	6

出土遺物

瓦埴類のほか、土器、金属器、石製品などが出土した。

瓦類 飛鳥時代から平安時代までの瓦が出土した。軒丸瓦171点、軒平瓦1点、垂木先瓦6点、鵝尾片、埴のほか、丸・平瓦がある(表4、図14)。

軒丸瓦は、飛鳥寺創建期のものが最も多い。素弁十弁のI型式(「花組」)は、小さな破片が多く、主体をなすのは素弁十一弁「星組」のIII～VIII型式である。III型式は、間弁が中房にとどかないIIIa(図4-1)と、間弁が中房につながるIIIb(2)があり、両者が出土した。IV・V・VIは小振りの「星組」(4～6)。角端点珠八弁蓮華紋軒丸瓦(5)は初出である。創建以降では複弁八弁蓮華紋のXIV型式が目立つ(7)。瓦範がシャープな段階(XIVa)から蓮子を彫り直し範割れを起こした段階(XIVb)まで各種があり、接合手法にも変化がある。初期は鋭い刃物で細かな斜格子刻みを丸瓦の凹凸面に入れる。次に、凹凸面ともタテと斜めの簡略な斜格子刻み目に変わる。この段階では端面にも刻み目を入れる。最後はやや太いたテの刻み目だけとなる。奈良時代後半のXV型式b(8)は、平城京元興寺6201Abと同範。

軒平瓦は平安時代の均整唐草紋軒平瓦のみ。川原寺と同範(川原寺763型式)で、飛鳥寺では初出。

垂木先瓦は、素弁九弁のI型式と、弁尖に稜線のはいる八弁のIV型式が出土した。I型式は大阪・新堂廃寺と同範(『年報1997-I』12頁参照)。

丸・平瓦は、総数39,505点2,296kg出土した。創建期が最も多く、これに7世紀後半の瓦が次ぎ、奈良時代の瓦はそれほど多くはない。これは軒丸瓦の出土傾向と一致する。創建期の瓦は、行基丸瓦と格子叩き目ないし粗い

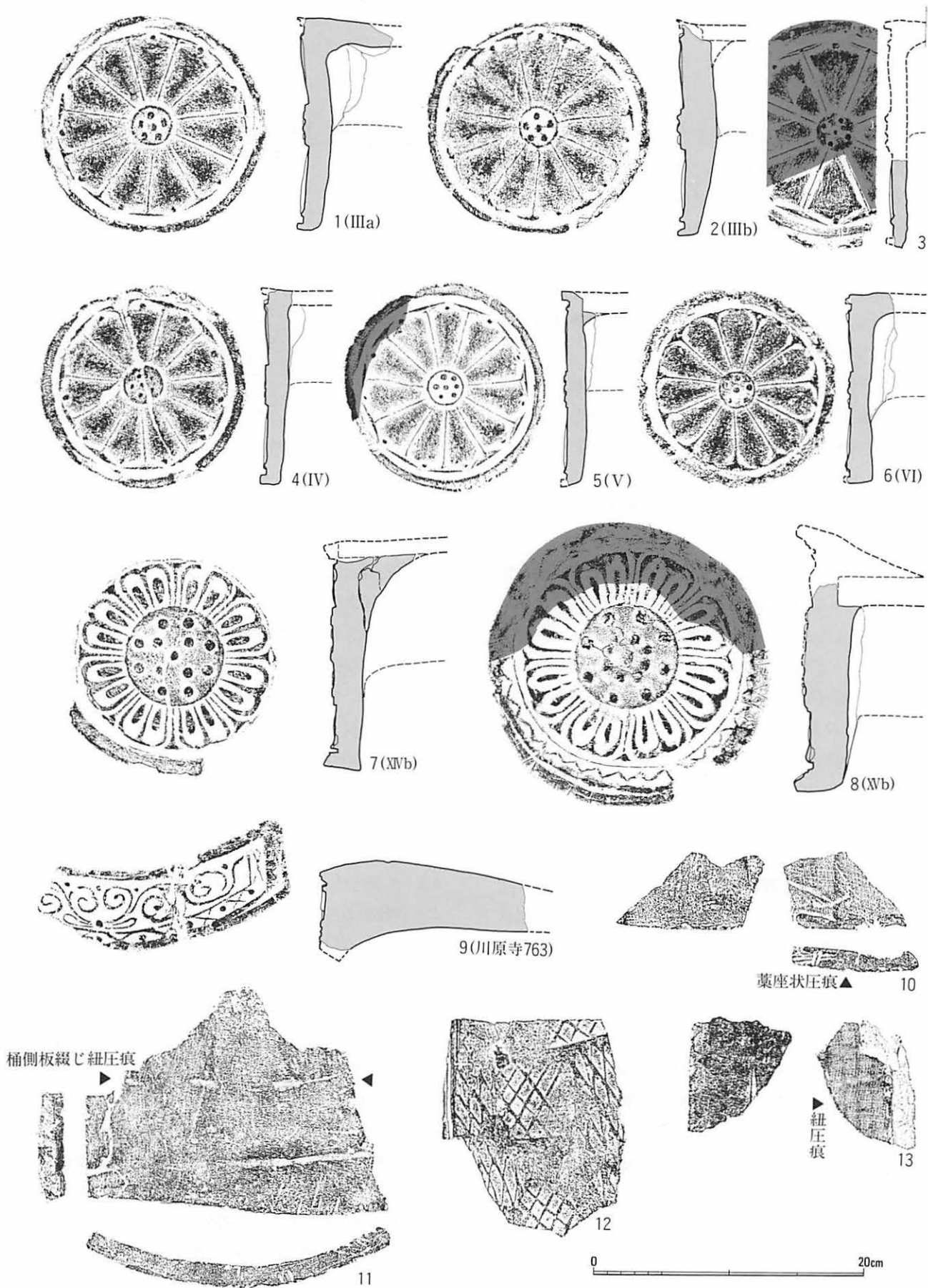


図44 飛鳥寺1996-1次調査出土瓦 1:4

平行叩き目の平瓦（「花組」に対応）および、玉縁丸瓦と細かい平行叩き目格子叩き目をタテにスリ消した薄手の平瓦（「星組」に対応）、の二群に分類できる。

行基丸瓦には、一本の模骨を使うものと側板連結模骨を使うものの二者がある。量は前者が圧倒的に多い。両者は、分割截線の入れ方が逆で、一本模骨の丸瓦は凸面側から、側板連結模骨の丸瓦は凹面側から入れる。玉縁丸瓦は玉縁内面に布目がつかない。分割截線は凹面側から入れる。

「花組」に伴う、粗い平行叩き目の平瓦には、粘土円筒を反転して広端側に補足の叩き締めを行うものがあり、凹面にあて具の痕跡が残る。格子叩き目の平瓦とも、分割凸帯は紐である。凹面は不調整、側面は破面をヘラケズリするb手法。

「星組」に伴う平瓦は、凸面をタテ方向に丁寧にナデ調整するのが特徴であり、上下2個4箇所の分割突起を目安に粘土円筒を4分割する。広端近くの凹面に、桶の側板を綴った紐の痕跡を残すものがある（図44-11）。類例は、大阪・新堂廃寺（鳥舎寺）にある（藤沢一夫「造瓦技術の進展」『日本の考古学』VI 歴史時代（上）1967年、286～310頁）。この一群も凹面は不調整、側面調整はb手法である。広端面に「藁座状圧痕」を残す例があった（10）。

7世紀後半の瓦は、大半が行基丸瓦と斜格子叩き目の粘土板桶巻き作り平瓦の組合わせである。平瓦は凹面をナデ調整し、凹凸両面の側辺に幅広い面取りをする（12）。この一群は軒丸瓦XIV型式に伴う。ほかに、叩き目が深い格子あるいは斜格子の平瓦や、凸面を完全にスリ消した平瓦がある。川原寺から搬入された玉縁丸瓦と凸面スリ消しの縄叩き平瓦それに凸面布目平瓦の一群、縄叩き桶巻き作り平瓦の一群がごく少量ある。また、竹状模骨丸瓦が1点確認できた（13）。

奈良時代の瓦は、行基丸瓦と一枚作りの縄叩き平瓦。叩き目や側面形に数種がある。

土管 暗渠SX740に使用されていた土管は分厚い円筒形で、連結のための細い玉縁部があり、筒部にはこれを挿入するためのえぐり込みがある。導水に使われる円孔部分は直径19cmほどだが、土管は、平均で全長約52cm、筒部長約38cm、重さ約22kgあり、極めて重厚である。個々の土管は、規格・重量にばらつきがあり、全長44.5～56

cm、筒部長33.2～44.5cm、重さ15.5～29kgの幅がある。

土管の成形は、円孔部となる布巻き軸に粘土を巻き付ける。玉縁部の円孔内面には、粘土紐の積み上げ痕跡が観察できる。表面は、ナデ調整、筒部のえぐり込みは、ヘラケズリでつくる。表面に「卍」のへら描き記号をもつものがあり、これらはある程度規格が揃うようだ。また、多くの土管は、表面にベンガラが付着していたが、記号かどうかは明らかでない。

土器 古墳時代から平安時代前期に至る土師器と須恵器、平安時代前期の黒色土器のほか、弥生土器や瓦器が出土した。

石組大溝SD6685の掘形からは、土師器杯A・C、鉢A、皿、ロクロ成形の杯B、高杯C、甕、須恵器杯H、壺、甕が出土。飛鳥II～III。SD6685の埋土からは、土師器杯C・H・高杯G、甕、須恵器杯B・G・H、壺、甕、瓶など、飛鳥Vまでの土器が出土。

素掘溝SD739下層の礫層からは、土師器杯A、皿、小皿、高杯G、壺、甕、須恵器杯A・B、碗A、鉢、壺など、飛鳥Vから平安時代前期（10世紀前半）までの土器が出土した。また、SD953の埋土上層からは、11世紀代の土師器皿が出土した。

古墳時代の土器は、竪穴住居SB933や河川堆積から5世紀後半のものが出土したほか、4世紀から6世紀後半に及ぶ。

金属器 20点ほどの鉄釘や刀子片のほか、SD739から青銅製刀装具（責金具）が出土した。刀装具は、長径3.9cm、厚さ0.6cm。

石製品 弥生時代のサヌカイト製石鎌と剝片のほか、縄紋時代後期の石棒1点が石組大溝SD6685の掘形から出

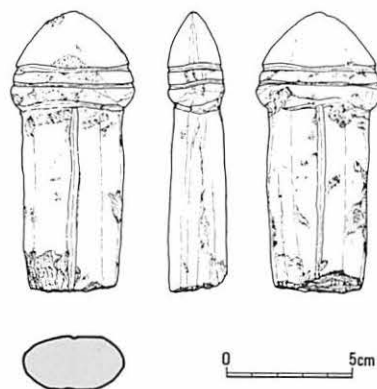


図45 石棒 1:3

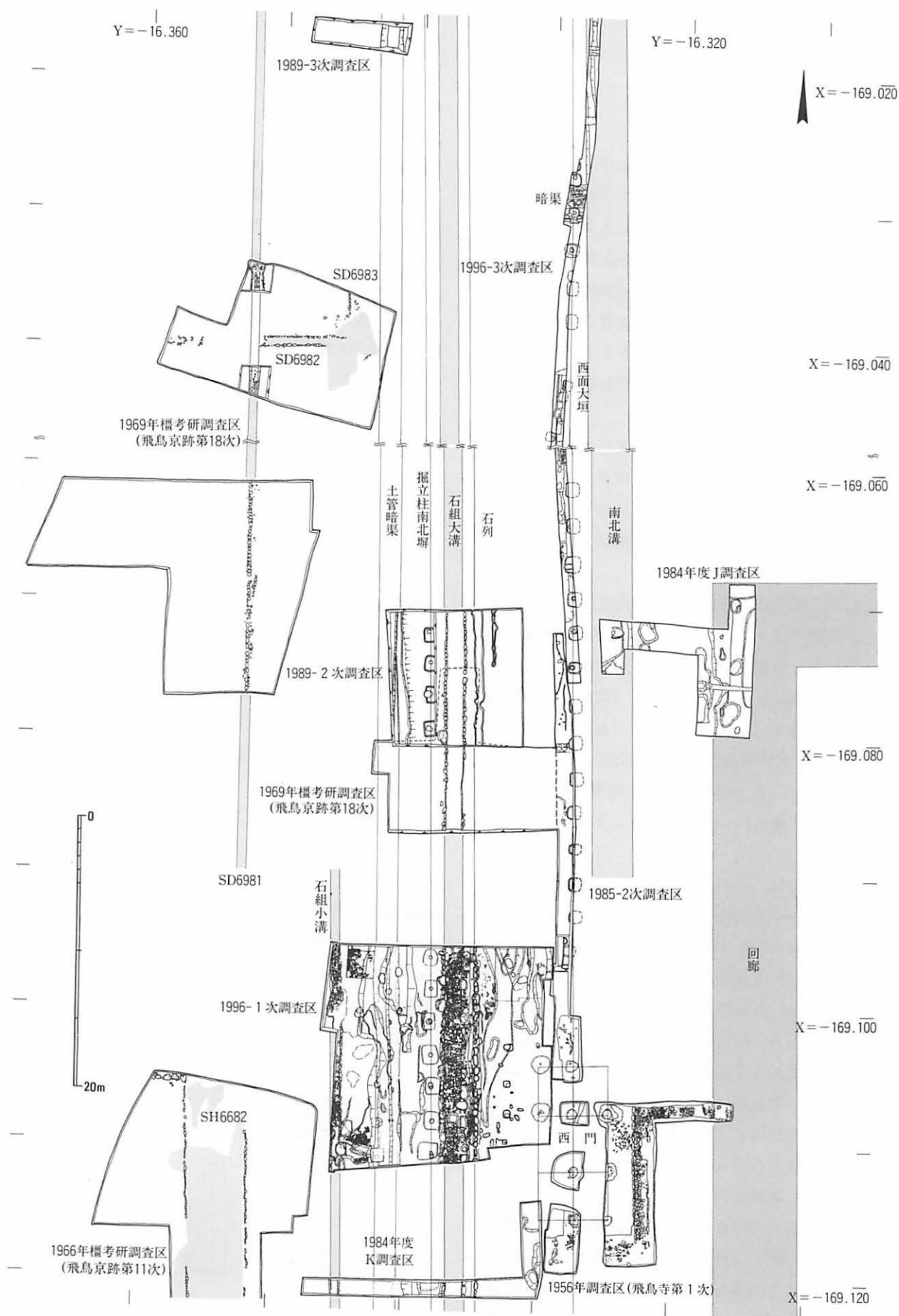


図46 飛鳥寺西門周辺遺構図 1 : 400

土した(図45)。頭部3条の横方向の沈線をめぐらし、軸部には両面に縦方向の沈線がある。下部を欠損する。全体に磨きを施すが、敲打痕が随所に残る。現存長11.1cm、最大幅4.92cm、最大厚2.3cm。

まとめ

西門の構造と規模について 今調査区東辺は削平が著しく西門礎石は失われ基壇土も完全に削平されていた。遺構検出面は基壇上面から60～70cm低い。しかし、礎石据付掘形により梁間2間の八脚門であることを確定した。1956年の調査成果と対比すれば西門脇の間の柱間は約3.5m(高麗尺10尺)とみてよい。基壇は掘込地業を行わず、礎石位置のみ据付掘形を掘る。掘形の底は基壇上面から約80～90cmの深さにあったと推測される。

また、基壇に関しては基壇西縁石と雨落溝側石の抜取痕跡かと思われる遺構(SX923・925)がある。この間を雨落溝と考え、そこに足場SS920が位置するので、構造的には妥当である。ただ、南門では背面には石組雨落溝が巡るが、前面は雨葛石一段で処理しているから、前面の雨落溝の存在を確定することは今後の調査にゆだねたい。

さらに、西門の足場穴を検出し、軒の出について新しい知見をえた。『飛鳥寺報告』では、西門の平側の軒の出について次のように復原している。「側柱心から雨落溝内側までの寸尺が矩尺の6.5尺、雨落溝巾が2.8尺であるから、矢張軒出は8尺位で、南門と一致することが知られる(40～41頁)」。今回検出した足場SS920と西門西側柱との距離は約2.3m(高麗尺6.5尺)で、この推定を裏付けた。また、妻側の軒の出は、足場SS921を軒先とみると北妻柱筋から約1.45m(高麗尺4尺)となる。『飛鳥寺報告』では、妻柱から基壇の南北縁までの距離を、1.64m(曲尺5.4尺)としているが、これだと螭羽の軒先が基壇の内側に収まる。西門は切妻八脚門なので螭羽の軒先と基壇縁が必ずしも一致しないかもしれないが、軒の長さ復原の一つの根拠とはなろう。両者を一致させた場合、基壇の南北長はこれまでの推定より40cmほど短くなり、13.4mに復原できる。

西門の創建軒瓦は、III～V型式の「星組」であろう。「星組」の瓦は中心伽藍では中門北側の瓦堆積の主体を占めており、西門の造営時期が中門や回廊に近いことを物語る。少量ではあるが垂木先瓦も出土した。これも西門に

用いられた可能性がある。鷗尾も破片が数点出土したがこれが西門に使われたかどうかははっきりしない。

西門外側の景観 西門外側で見つかった遺構は2時期に区分される。7世紀初頭頃の掘立柱南北塀SA738と柱列SX938・土管暗渠SX740、そして7世紀後半の石組大溝SD6685・石組小溝SD6684・石列SX735・石敷SX736・737・937・950など、の二つである。

南北塀SA738は西門の棟通りの西10.5m(高麗尺30尺)に位置し柱間約2.6mも7.5高麗尺とみてよからう。また、南北塀SA738と柱列SX938の間隔は約3.2mで高麗尺9尺である。飛鳥寺の建物配置が高麗尺の地割を基準とすることは既に指摘されている(『飛鳥寺』飛鳥資料館図録第15冊 1986年、41～43頁)。飛鳥寺とその西側の地域の一体性が地割の面からも言及できよう。また土管暗渠SX740に先行する瓦敷SX935は飛鳥寺の「星組」に伴う丸・平瓦で構成されていることもこれを裏付けるだろう。

過去の調査成果を参考にすると、土管暗渠は、南北100m以上続き、南から北に上水を流下した。使用された土管の数は、250本をくだらない。南北塀SA738も少なくとも南北50m以上にわたって続き、飛鳥寺西の一郭の東を限る施設とも考えられるが、西面大垣との間隔があまり広くない点の一つの問題点として残る。

一方、7世紀後半の遺構は、石組大溝SD6685が西門あるいは西面大垣の西9mにあり、SD6685と石組小溝SD6684との距離も同じく9mである。これは、小尺30尺(大尺25尺)にあたり、基準尺がかわった可能性が高い。これらの遺構が造作されたのは、西門が複弁のXIV型式軒丸瓦で屋根修理された時期、飛鳥寺が官寺に準ぜられた天武朝であろう(『年報1995』16・17頁)。遅くともこの時、飛鳥寺西門の外側は石組溝や石敷に覆われた完全に人工的な景観に変貌した。

はじめにも述べたように、飛鳥寺西門の外は、『日本書紀』に何度も登場する「飛鳥寺の西の槻の木の広場」があったところである。中大兄皇子と中臣鎌子との出会いや、壬申の乱そして天武朝以後の饗宴の場として、「槻の木」の広場は飛鳥の一つの中心だった。今回の調査地が「飛鳥寺の西の槻の木」の一部に相当するとの確証は得られなかったものの、飛鳥寺の西方の状況を推測するに足る資料をえた。今後の調査が期待される。

(花谷 浩)

2 飛鳥寺1996-3次調査

はじめに

この調査は高市郡明日香村飛鳥地内について明日香村が行う下水道整備事業に伴う事前調査の第2年次の調査である。今年度はⅠ：飛鳥寺講堂北から講堂東、Ⅱ：講堂西、Ⅲ：西面大垣、Ⅳ：水落遺跡南の4箇所の里道上に設けられた敷設予定区間を対象とした（39頁の調査位置図参照）。

遺構

Ⅰ区 道幅が狭いために全長80mの区間に6個のトレンチを設けた。講堂東辺の4つの調査区（ⅠA～C・F区）では表土下40cmの古墳時代の遺物を少量含んだ暗褐色粘質土面で、近世～現代の水路護岸やその採取穴等を確認。飛鳥寺に関わる遺構は検出されなかった。講堂北方では現来迎寺入口の石段下に南北約8m（ⅠD区）、県道に面して南北3mのトレンチ（ⅠE区）を設けた。ⅠD区では地表下0.7mの茶褐色粘土上面で土坑1基等を検出した。土坑は一辺約1m、深さ約0.4m。瓦、土器の小片が含まれる。ⅠE区では地表下1.3mの茶褐色粘土上面で土坑1基を検出した。土坑は一辺約1m、深さ約1m。土坑の上面は灰褐色砂土と黄色粘土の互層であり、ある時期の境内地の整地面であろう。

Ⅱ区 講堂の北西から西辺犬走上を通り北回廊に至る約80mを対象としたが、講堂西南隅以北は道幅が狭く、今回は講堂西南隅から北回廊北端までの約23mについて幅0.8mの調査区を設けた。その際、調査区の北端を1957年の第3次調査区と重複させた。これは第3次調査の成果を現行の国土方眼座標及び標高で再計測することによって、今回調査が及ばなかった区間についても下水道管敷設のためのデータを得るとともに、講堂周辺部の復元をより確実にすることを目的としたもので、第3次調査の倒壊した基壇縁石等を再発掘した（図47）。

その結果、調査区の北端付近は南辺犬走と基壇の一部が位置するとみられた。しかし、旧調査区の南端は近世陶器の入った土坑による攪乱が著しく、その下面で柱穴1個を、東壁面で基壇あるいはその南外方の整地の一部と思われる土層を確認した以外は明確な遺構は検出されなかった。柱穴は一辺1.2m、深さ1.4mで基壇縁直下にあり埋土に瓦を含まないことから講堂以前の遺構と考え

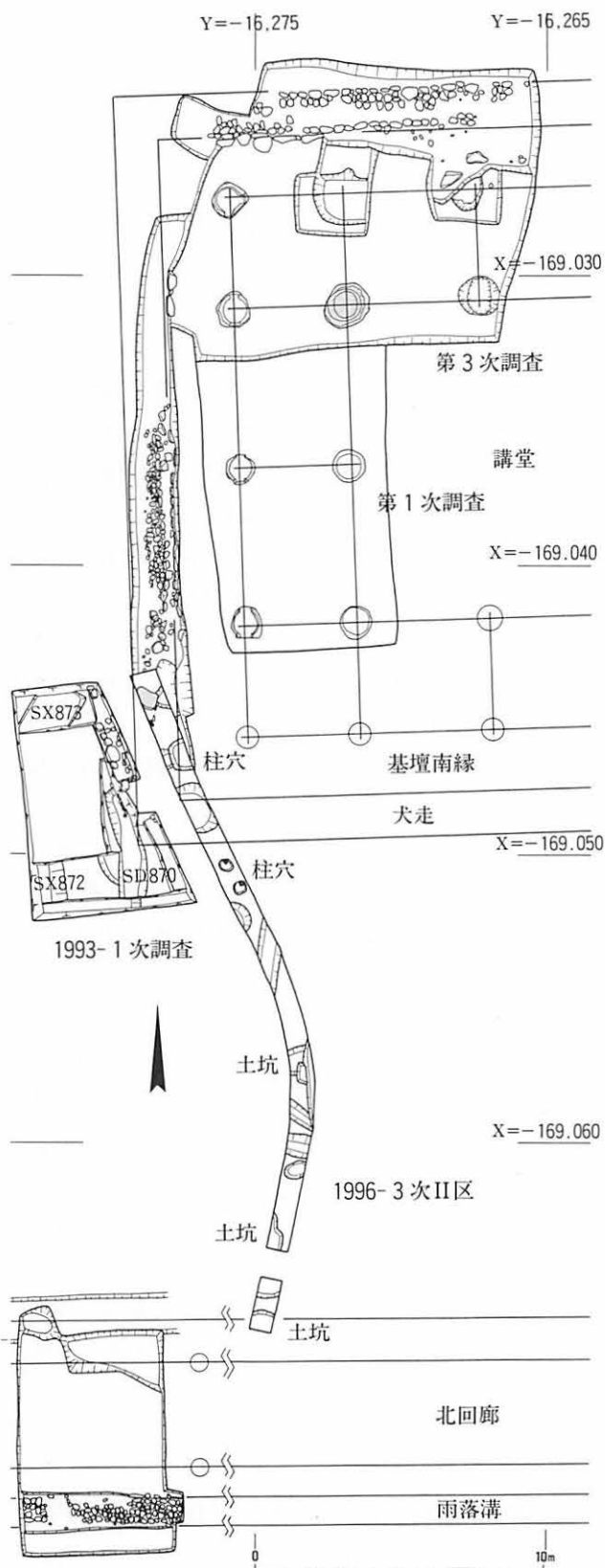


図47 Ⅱ区遺構図 1:250

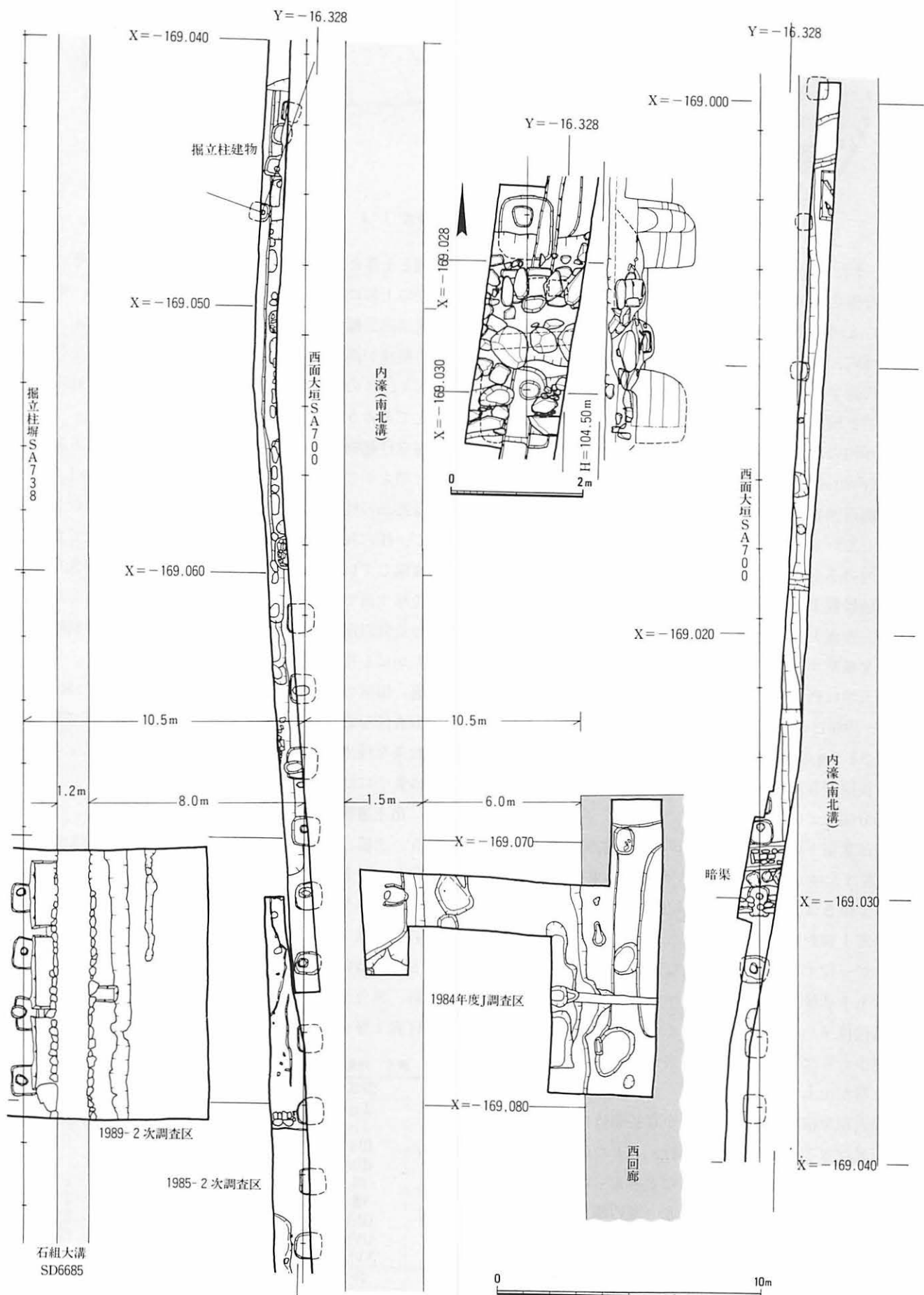


図48 III区遺構図 (1:200)、暗渠・石組溝平面・断面図 1:80

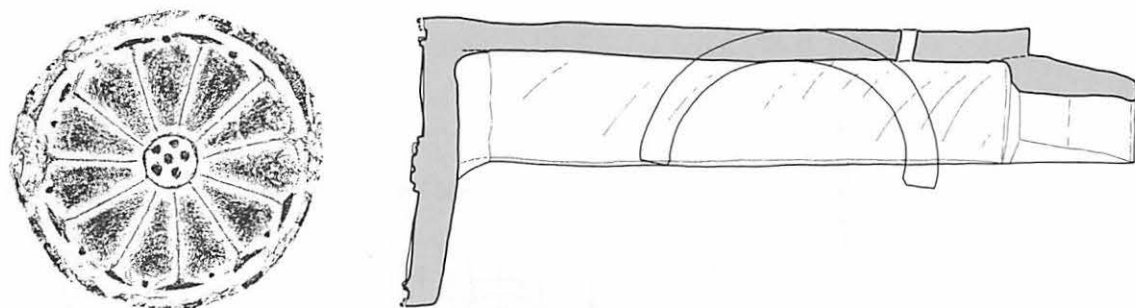


図49 内濠出土軒丸瓦Ⅲb型式 1:4

られる。また、西接する1993-1次調査で東折するかと推定された南北溝SD870の延長部も確認されなかった。講堂南から北回廊までの間も遺構は稀薄で、径0.5mの掘形をもつ柱穴、古墳時代の土器を含む暗褐色粘土の土坑、平安時代前半の土器を含む一辺1.5m以上、深さ0.4mの土坑などを検出したにとどまった。

Ⅲ区 西門の北、西面大垣が想定される村道上に幅0.8m、全長約80mの調査区を設定した。調査区の南では1984年度J地点調査区、1985-2次調査区、1989-2次調査区と隣接している(図48)。

調査地の基本的な層序は上から、現道路、茶灰色土、暗茶褐色砂質土であり、主に地表下0.4mの暗茶褐色砂質土面で、西面大垣、内濠、飛鳥寺以前の掘立柱建物、西面大垣を横断する暗渠(石組溝)等を検出した。

西面大垣は西門との取り付け部から11~16間目の6個と、25~29間目の5個の柱穴を確認した。柱穴は一辺1.2m、深さ1.5mの掘形で、柱は直径20cm。柱間は約2.6m等間に復原できる。大垣は国土方眼方位に対して北で西へ約50分偏している。

内濠は素掘りの南北溝で調査区北半で約30m分を検出した。溝は大垣の方位と一致し、大垣心の東1.5mに西岸をもち、深さは0.7m。今回の検出は西岸に限られたが、1984年度J調査区で東岸を確認した南北溝と堆積土や出土遺物が一致することから、溝幅は約3mに復原される。埋土は上下2層に大別され、茶褐色砂質土の上層からは奈良時代後半から平安時代後半までの土器が、下層の黄灰色粘土からは飛鳥寺創建瓦や奈良時代初頭から中頃までの土器が出土した。

西面大垣を横断する溝は西門から29間目にある。溝は構造が異なる3条が併走し(図48)、ともに内濠の水を大垣の外に排水する機能を果たしたと考えられる。重複関係と底の深さからみて、中央→北→南の順に作り替えられている。中央の暗渠は内幅25cm、深さ10cmの木樋に凸面を上にした平瓦を2枚重ねて蓋をし、その両側と上部を玉石で囲う。暗渠は大垣柱掘形上にあり、天井石上面から木樋底面までは約0.6m。北の暗渠は中央暗渠の北0.8mに平安時代初頭の平瓦の凹面を上にして敷き、その

両側と上部を玉石で囲い、天井石の上にも玉石を詰める。暗渠の上部には内濠上層のあふれがのびている。南の石組溝は内法幅0.3m、深さ0.3mで底に玉石を敷く。開渠の可能性が高い。北側石が大垣の柱の上にあって共存は難しく、この石組溝の構築は大垣の廃絶時かそれ以後のことであろう。

掘立柱建物は柱穴3個を検出しただけで棟の方向や規模は明らかでない。柱穴は一辺0.8~1.0m、深さ1.4mで直径25cmの柱痕跡がある。柱間は南が1.8m、北が2m前後で、柱穴列の方位は国土方眼方位に対して北で東へ約30度偏している。柱穴は古墳時代後期の土器を含む暗茶褐色粘土面で検出され、埋土に瓦を含まないことから飛鳥寺造営以前の遺構と考えられるが、厳密な造営時期は明らかにし得なかった。

Ⅳ区 Ⅲ区の西約100mの里道上に南北約50m、幅0.8mの調査区を設けたが、調査区南半の地表下0.5mで東西小溝数条を検出しただけで、その下の深さ0.5m以上の茶褐色砂質土には遺構遺物等はみられない。

出土遺物

瓦、土器、金属製品がある。瓦には表5に示した飛鳥時代から鎌倉時代の軒瓦のほか、近世近代の軒瓦、垂木先瓦、へう書きのある平瓦、塼と多量の丸平瓦がある。図49は内濠下層出土の飛鳥寺軒丸瓦Ⅲb型式の完好例である。土器には古墳時代から平安時代までの土師器、須恵器、黒色土器、緑釉・灰釉陶器、近世陶磁器があり、Ⅱ区表土層から出土した14~15世紀の外国産三彩皿片が

表5 飛鳥寺1996-3次調査軒瓦点数表()内は種不明を含む

	型式	I区	Ⅱ区	Ⅲ区	計
軒 丸 瓦	I a	} (1)	2 } 2 (3)	8 } 9 (12)	10 } 11 (16)
	I b			1 } 1 (2)	1 } 1 (2)
	Ⅲa			2 } 2 (7)	2 } 3 (9)
	Ⅲb			1	1
	VII	1		1	2
	VIII			1	2
	XIIA			2	2
	XIVa			1 (7)	1 (8)
	XVb	(1)		1	1
	計	3	5	31	39
軒 平 瓦	重弧紋(新)		1		1
	VI	1			1
	鎌倉		1		1
	計	1	2		3

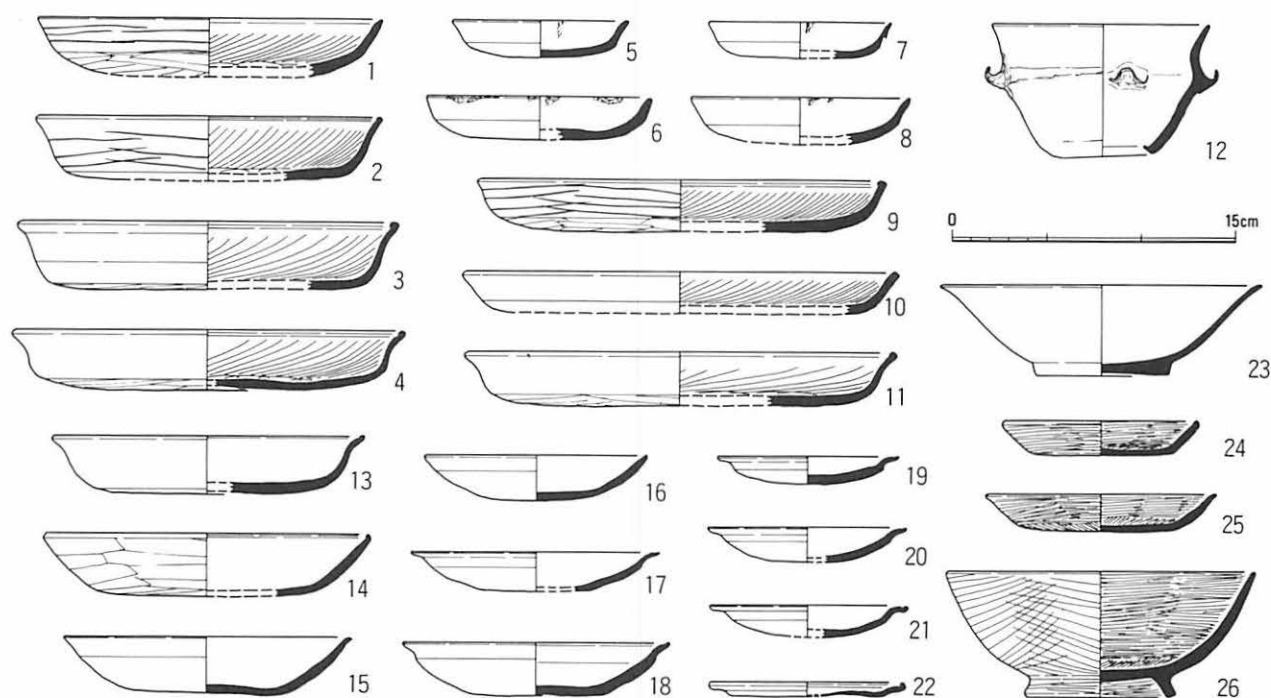


図50 内濠出土土器 1:4 下層:1~12、上層:13~26

珍しい。ここでは、飛鳥寺の変遷過程を理解する上でも重要なⅢ区の内濠出土土器を図示した(図50)。内濠出土土器は上層と下層とに大別され、いずれも土師器杯、皿が大半でその多くに灯明痕跡がある。下層には7世紀末から奈良時代中頃(平城宮Ⅲ)までの時期の土師器杯C(1)、杯A(2~4)、皿C(5~8)、皿A(9~11)、甕、ミニチュア甕(12)、須恵器杯B、同蓋、壺などがあり、上層には奈良時代後半(平城宮Ⅳ)から平安時代後期までの、土師器杯(13~18)、皿、小皿(19~22)、黒色土器A類碗、同B類碗(26)、同B類小皿(24~25)、緑釉陶器碗(23)、灰釉陶器皿がある。

まとめ

Ⅱ区では講堂に関わる新たな知見は得られなかったが、第3次調査地の倒壊した基壇緑石を再発掘、再計測し、1993-2次調査時に再測した身舎西北隅の礎石や1993-2次調査の講堂北東部の遺構とともに現行の国土方眼座標上に展開した結果、講堂基壇は『飛鳥寺報告』に示された1度33分44秒よりもやや大きく北で西へ偏していると考えられるに至った。それによれば『飛鳥寺報告』では復原基壇西縁線からはずれていた講堂基壇西縁の立石南半が、北辺と正しく直交するのである。図47ではその結果をもとに、第1次調査時に測図された講堂西庇南半の礎石4個の位置を修整して作図した。講堂が東西8間

35.15m(100大尺)、南北4間18.6m(53大尺)の建物で、基壇は東西114大尺、南北65大尺であるのは変わらない。基壇の外には北では幅1.5mの犬走があり、西でも同様とすると里道の西端に位置する。ただ、上記は現状での整合性を求めたものであり、結論は全面的な再調査に委ねるべきである。

内濠は寺域東北隅では大垣の内側約2mに外岸を置いた幅約2mの素掘溝として検出されており、今回のそれと一体の施設と考えられる。しかし、北門の調査では大垣から約6m離れた位置にあり、西門前では確認されていない。また、出土土器によれば西内濠は平安時代まで存続するが、北内濠は奈良時代の土坑で壊されており、廃絶時期も一様ではなかったであろう。

今回検出した大垣を横断する暗渠は大垣を廃したあと、開渠の石組溝としている可能性が高く、近接した内濠に築地崩壊土の堆積がみられなかったことから西限施設は終始掘立柱塀であったと考えられる。大垣の造営時期については内濠の瓦からは創建時まで遡る可能性があるものの、1984年度K調査区では大垣と併存する石組大溝SD6685の造営が7世紀後半のこととしており、今回も大垣が創建時の造営であることを示す証左は確認されなかった。

(西口壽生)

3 飛鳥寺東南の調査（第84次）

本調査は、奈良県が計画している万葉ミュージアムの建設にともなう事前調査である。調査区の面積は2400㎡で、1月から調査を開始し、97年度も調査を継続中である。そのため、96年度の報告は中間報告にとどめる。

調査地は飛鳥寺の東南方に位置する。飛鳥寺の中心伽藍の様相は1956・57年の調査で明らかになっている。寺域については、1956年と1979年に南限、1977年に北限、1982年に東限の塀を確認している。それらの成果から、本調査区内に寺域の東南隅が位置すると推定されていた。その一方で、調査区の西側には推定寺域の南限をかすめるように丘陵が張り出しており、丘陵と寺域との関係が問題点でもあった。また、1991年には、発掘区南側の飛鳥池の池底から、7世紀後半から8世紀初めにかけての、金属やガラス製品の生産工房跡（飛鳥池遺跡）を発見している。本調査区にも工房に関連する施設が広がっていると推定され、工房の広がりや飛鳥寺との関係も明らかになると考えられた。

調査区の旧地形は西側の丘陵から東に落ちる谷になっており、この谷に整地層が何層も積まれて、遺構面の層位は複雑な様相を示している。遺構検出は主として藤原宮期以降の整地層上でおこなった。

年度内の調査では、飛鳥寺寺域東南部分の区画施設は検出していない。すくなくとも藤原宮期以降は、調査区内に寺域東南隅が位置しないようである。一方、調査区



図51 第84次石敷井戸（西南から）

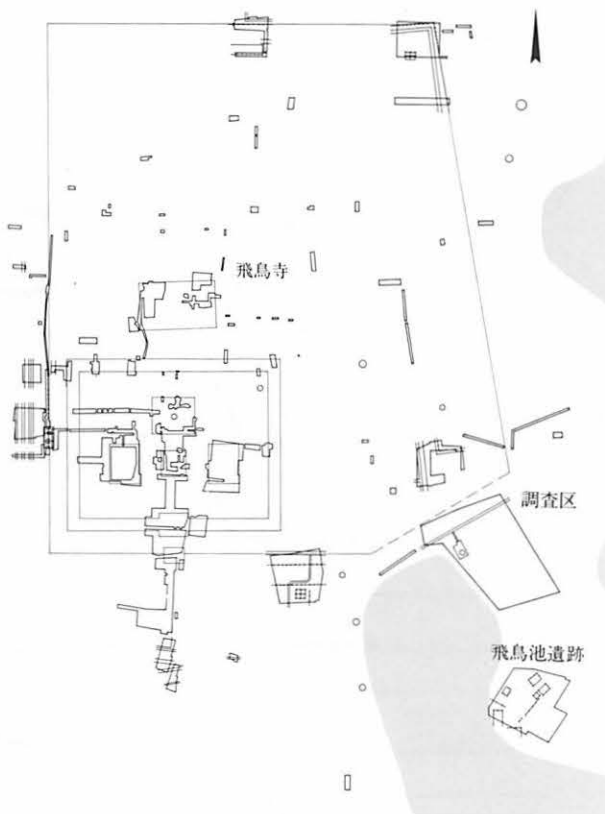


図52 第84次調査位置図

の北端で東西溝（藤原宮期～奈良時代前半）と、その南側で溝に沿った掘立柱塀を検出した。溝の北側でも、礎敷の通路をはさんで、大量の瓦が出土しており、塀の存在が予想される。したがって、溝の北と南それぞれに閉鎖された区画が存在していたと推定できる。溝は飛鳥寺の伽藍の方位よりも東で北に振れ、寺域東南隅を斜めに横切る位置にあり、従来の予想に反して、寺域は東南隅では斜めに切れていたと考えられる（図52）。

東西溝の南側には、ほぼ溝の方位に沿って建物や塀が建つ。調査区の北西にある井戸は、東西6m、南北8.5m、深さ約60～80cmの範囲で掘り下げられ、壁面は石積で化粧され、内部に石敷が施され、石敷面の南寄り中央に井戸本体がある（図51）。石敷の周囲には浅い溝がめぐり、井戸本体から北へ抜ける排水溝と合流して、石組の暗渠につながる。この暗渠が東西溝へ接続する。

東西溝の南側の区画では、建物や井戸の他に、炭化物を含む土坑を検出している。出土遺物にも鋳銅に関係したルツボ、羽口等があり、区画内に展開する施設が飛鳥池遺跡と一体であった可能性を示している。そのいっぽうで、銅箸、灯明皿、漆塗鉄鉢形須恵器や飛鳥寺所用瓦なども出土しており、飛鳥寺との密接な関係も窺わせている。

今後の調査では、寺域東南部の区画施設の検出、東西溝南側の区画内の遺構変遷とその性格、飛鳥寺と飛鳥池遺跡との関係の解明が焦点となる。（島田敏男／遺構）